

あの戦争を語り継ぐ  
平和都市宣言  
30周年記念連載 ⑩

大塚義夫さん 90歳

富塚地区在住

空技廠での工員生活  
と戦争中の富塚

私は大正15年、富塚生まれで尋常高等小学校（旧制の小学校）を卒業後、横須賀第一海軍航空技術廠（海軍機の試作・実験・研究などをする機関）工員養成所に入りました。同期は約700人で2年間の学科・実習・寄宿生活後、海軍工作科予備補修生となりました。これは工員を海軍の生徒とすることで陸軍に徴兵されることを防ぐ意味があり、工員よりやがては技師に

なるコースでした。

工員時代は午前6時30分より7時までに出勤、定時は午後5時でしたが、人手不足のため7時まで残業することが普通で、9時まで勤めることもよくありました。給料は業績により加給があり90円くらいでした。休日は2週間に1日であり金の使用道はなく、貯金していました。富塚からも出征し、外地に行きなくなった人が何人もいました。「赤紙」と言われた召集令状が来れば、妻子がいても行くしかありません。

鳥見神社に集まり、「祝出征○○君」と記した垂れ幕が掲げられ、本人は本社前に立ちあひさつ。万歳三唱し「死んで還れと励まされ」と軍歌で見送られ、出征する人は皆死を覚悟してい

ました。

戦死した人の遺骨が返ってきたとき小学校で村葬を行いました。長男を失った母親が墓地で「なんて不幸せなんだろう」と泣き崩れ動けなくなり、皆シユンとしてしまいました。何とかなだめてようやく帰ったことを覚えていきます。

陸軍に徴兵され広島に行った人もいました。その人たちから話を聞くと、原爆投下時、市内からは山を隔てた場所にいたさうで、空がピカッと光るのを見たさうです。その人たちは後日市内に入り、原爆ドーム前辺りの川を埋め尽くすほどの遺体の片付けに当たったようので、戦後被ばく手帳が交付されました。

■ 企画政策課男女共同参画室内線 3354